交通事故遺族の想い

Ｔ．Ｉ

平成２２年８月２８日、達也がバイクで交差点直進しようとしたところ、対向乗用車が前方確認を怠り、内小回り右折をし、衝突。加害者は友人宅のバーベキューに遅れ、道を間違え、元に戻ろうとしていた。（警察の説明）

友人から「事故している」と連絡があり、状況が理解できませんでしたが、心のどこかで骨折程度かな？と思っていました。事故現場に向かう時（私は助手席）、通話中のままだったので「うーうーうー」とうめき声が聞こえてきました。「誰の声！達也の声？いやーっ」と車内でパニックになりました。主人に「落ち着け」と怒鳴られましたが、体が震えました。事故現場近くに着くと、車が渋滞してきたために車から飛び降り、達也の所に駆け出しました。目に映ったのは交差点内でもがき苦しむ達也と、達也を抱きかかえている友人の姿です。私は無我夢中で達也を抱きかかえました。

４時間後、達也は外傷性右血気胸による大量出血ショック、右急性硬膜下血腫で永眠しました。先生に、「私の心臓も肺も全部あげるから助けて」とお願いしましたが、当然先生は無言で首を横に振りました。目の前で我が子が死んでしまう・・・言いようのない辛さです。

加害者は誰？顔もわかりませんでした。それは、私が事故現場で達也を抱きかかえている時、加害者の姿を全く見てないからです。

（後で聞いた話）加害者は、もがき苦しむ達也の救護もせず、交差点内に

達也を放置し、自分だけ安全な歩道内で待避し、救急車・警察への連絡さえ怠っていました。

警察の方には、「その場にいて逃げていないから救護義務違反にはならない」と言われました。法律はそうかもしれない。でも、放置した。救護しない。声掛けさえない。私の気持ちでは救護義務違反です。

被害者参加制度を利用しての刑事裁判が行われました。

閉廷間際に裁判官の言葉が私の心に響きました。「執行猶予が付きましたが、あなたは無罪ではないですよ！有罪ですよ・・・」と。

本当にそうです。

息子を亡くし落ち込む私に、「神様が決めた寿命だったのよ」、「運が悪かったのよ」と人は言い、私自身も、「ここに引っ越さなければ」、「あの時こうしてれば」と自分を責め続けました。

でも違うのです。

加害者が前方を見ていれば・・・安全確認していれば・・・内小回りをしなければ・・・防げた事故です。決して寿命でも何でもありません。

加害者が達也の命を奪ったのです。法により刑が下され、それで解決したのではありません。戻ってこない尊い命を奪った事実。私たち家族の幸せも未来も奪ってしまったことを忘れないでください。

達也を失い、法律の壁に苦しみ、世間の噂に傷つき、達也のいない家が寂しくて、達也に逢いたくて悲しくて、達也の声が聞けなくて涙を流し、あの

日から私は止まったままです。時には、なぜ私は生きているのか？なぜ私は達也の所に逝ってあげないのか・・・なんて冷たい母親なのか、息子に寂しい思いさせて平気なんだ。と自分が嫌になり・・・自分を責め、それでも私は生きていかなければなりません・・・

達也へ

たっちゃん、痛かったね。苦しかったね。もっと生きたかったね。

助けてあげられなくてごめんね。お母さんは、たっちゃんの笑顔が大好きだった。

今でも、ふっと「母さん」と呼ばれるような・・・いまにも２階から笑顔で下りてくるようです。たっちゃんのいないこの世界が苦しくて苦しくてたまりません。きっとそんな母の姿を見て、心配しているでしょうね。きっと「母さん、泣かんで」と言っているでしょうね。でもね、たっちゃん・・・まだまだ涙が出るの。たっちゃんのことが大好きだから・・・大切だから・・・だから、もう少し泣かせてね。